

研究ノート

Creatio と Emanatio

—二つの解釈をめぐる—

野 町 啓

アウグスティヌスは、《De civitate Dei》(XI, 21, 42 sqq.)において、被造物について、われわれが特に知らねばならぬこととして、① quis eam fecerit ; ② per quid fecerit ; ③ quare fecerit, という三つの問題を提起し、《創世記》(1 : 3) を例証としながら、それぞれに対し、〈Deus est〉 ; 〈Dixit : Fiat, et facta est〉 ; 〈quia bona est〉 を答えとして提示している。そして、第三の問題に対する答えをさらに敷衍し、〈nec causa melior quam ut bonum crearetur a Deo bono. Hanc etiam Plato causam condendi mundi Justissimam dicit, ut a bono Deo bona opera fierent.〉と述べている (op. cit., 48~51)。第三の問題は、いわば、創造の根拠への問いであり、これに対し、神の善性をあげることは、彼自身言及しているプラトンにすでにみられ (Tim. 29E)、《創世記》の解釈に際し、彼以前にも、たとえばアレクサンドリアのフィロンにみられるように、しばしば典拠として援用されている。⁽¹⁾ 創造者の善性 (quia bonus) と被造物の善性 (quia bona) との間に analogia の関係を措定しつつ、創造の quaestio juris を究極的に神の善性に求めようとする発想は、宇宙を創造・生成いづれの観点から把握するにせよ、一つの伝統として定着化したものと考えられる。彼の場合も例外ではなく、このような立場からする創造の理解が、その著作の随所にみられるが、特に、先⁽²⁾にふれた《De civitate Dei》第XI巻22~24章、および、《Confessiones》第XIII巻1~4章は、その典型であり、《De doctrina christiana》(I, 32, 35) にみられる〈Quia enim bonus est, sumus〉は、このモチーフを集約化した表現とみることができよう。

他面、彼においては、創造の根拠を、神の善性ではなく、意志に求めようとする主張がみられる。⁽³⁾ これは、神を人格神としてとらえ、しかも、創造が無からな

されたことを強調しようとする場合、創造を、神のなにもものにも制約されない自由な意志的行為とみようすることは、当然だといえよう。また、このような発想は、神における *facere* と *velle* の一致から、神の万能性を強調することにもなる。事実、キリスト教的著作家・教父においては、神をいわば *causa finalis* としてとらえ、その善性に創造の根拠を求めることよりも、むしろ、神を *causa efficiens* としてとらえ、創造における意志的契機 (*quia voluit*) と自由を強調しようとする傾向が、⁽⁴⁾ 支配的にみられるといつてよい。ところで、彼においては、*<quia bonus>*、および *<quia voluit>* の両モチーフが、同一のテキストにおいて用いられている場合もみられる。⁽⁵⁾ 彼における、このような両モチーフの共存と、その関連づけをめぐって、二つの対立する解釈が行なわれている。本稿では、R-H. Cousineau, K. Kremer の二人をとりあげ、若干の考察を試みることにする。[Cousineau, “*Creation and Freedom, An Augustinian Problem: <Qui, voluit? and/or <Quia bonus?>*”—*Supplément à la Revue des Études Augustiniennes, Recherches Augustiniennes, Tom. II. Hommage au R. P. Fulbert Cayré*, 1962 所収—(以下本稿では、C. F. と略記)—; Kremer, *Das “Warum” der Schöpfung: “Quia bonus” vel/et “Quia voluit”? Ein Beitrag zum Verhältnis vom Neuplatonismus u. Christentum an Hand d. Prinzips “bonum est diffusivum sui”*—*Parousia, Festgabe für J. Hirschberger* 所収—(以下本稿ではK¹ と略記)—; *Die neuplatonische Seinsphilosophie u. ihre Wirkung auf Thomas v. Aquin*—(以下本稿ではK² と略記)—]

Cousineau は、創造の根拠に関して、アウグスティヌスの思想構造の中に、両立しがたい *antinomy* の存在と、*dialectic* によるその克服の試みをみようとする。彼のこのような観点の根底には、創造という神の業と、神の善性との関連のとらえ方に関して、アウグスティヌスに対する新プラトン主義の影響と、それからする発想の存在を重視し、ひいては、*creatio* と *emanatio* の両者を、対立⁽⁶⁾ においてとらえようとする立場があるように思われる。敷衍すれば、彼は、*<quia bonus>* と *<quia voluit>* との両者を、アウグスティヌスの思想体系にみられる、*communicabilis-inmutabilis* ; *immanens-transcendens* ; *spontaneus-liberum arbitrium* ; *aeternus-in tempore* ; *causa finalis-causa efficiens* などの諸概念との

関連の下に, thesis-antithesis の関係においてとらえようとする。そして, 彼は, <quia bonus>と<quia voluit>の両者を, それぞれ, アウグスティヌスにおける Determinism, Voluntarism の典型を示すものとしてみようとするのである。たとえば, 彼は, 両モチーフを antinomy として措定したうえで, アウグスティヌス自身にみられる, amor の契機による両者の総合の企図の存在をみとめる。そしてアウグスティヌスは, Platonists にみられる<bonum diffusivum>を, <amor diffusivus>へと転化, 再解釈しようとした, というのである (C. F. p. 262~3, n.43; p. 269)。しかし, 彼は, この試みが, 十分に成功しているとは思わず, 両モチーフの総合の契機と可能性は, むしろアウグスティヌスにおける Zeitlichkeit の概念に求めるべきだとする仮説を提示し (C. F. p. 270~271), 論述をとじている。

創造を, キリスト教的な観点からとらえようとするならば, 当然, 神の意志を第一義的に考えなければならず, また, そこに, ギリシアの宇宙論の伝統・系譜を加味するならば, 神の善性が考慮されなければならなくなろう。この両面を, いかに関連づけ, 考えるかは, アウグスティヌスが直面した問題でもあろうが, 単にそれにとどまらず, 彼の思想を解釈しようとする現代のわれわれの問題だともいえる。Cousineau の観点も, 直接には, 創造の根拠を, 究極的に神の意志に求めるべきだとすることから, 両モチーフの間に, antinomy を考えているように思われる。換言すれば, 彼は, 創造の根拠を, <quia bonus>に求め, 神を causa finalis としてとらえることは, creatio における必然性の契機が強調されることになり, ひいては, 神の創造における自由をおびやかすことになる, とみているのである。しかし, 両モチーフをこのように対立視することが, はたして妥当であるかどうかは, さらに検討される必要がある。この問題は, 先にふれた, アウグスティヌスにおける新プラトン主義の位置づけとも関連してくるが, より根本的には, 創造の根拠を, causa finalis, causa efficiens といった, いわばギリシア的な概念の枠により処理することの是非に還元されうるように思われるのである。

神を causa finalis として把握した場合, 創造の業と神の善性との関係について, アウグスティヌス自体のうちにもみられることであるが, 大別して, およ

そ次の二つの説明方式が可能であるように思われる。第一に〈participatio〉の発想を創造について適用することが考えられる。⁽⁸⁾第二に、神の善性の「溢出」(ex plenitudine, per abundantiam)として、創造をとらえることもできよう。⁽⁹⁾これら二つの発想は、それぞれ、前者は、すでにプラトンにより、イデアと個物の関係を示す際に、また後者は、プロティノスが、「一なるもの」から「ヌース」が産出される過程を叙述するにあたって用いており、ギリシア哲学に伝統的なものともみることができる。⁽¹⁰⁾しかし、これら二つの観点は、アウグスティヌス自身両者を用いているとはいえ、キリスト教的創造論と低触するいくつかの問題を内包している。前者についてみるならば、それは、神の *inmutabilis* という特質とは調和しえても、あまりに *static* であり、創造の業を十分に示すものとはいえ、かならずしも説得的ではない。神は、*causa finalis* としてよりも、むしろ *causa formalis* の面が強調され、把握されることになる。⁽¹¹⁾しかし、問題は、より後者のうちにあるといえる。そして、問題の根源は、プロティノス自体のうちに求められるのである。

プロティノスは、善なるものは、まさに善なるが故に (*quia bonum*)、自己の善性を溢出せざるをえなくなり、その結果、自己より低次の存在を、自己の似像として、つぎつぎと生み出していかざるをえない、という。⁽¹²⁾彼は、この原理の下に、「一なるもの」—「ヌース」—「プシュケー」の産出過程を叙述しているわけである。しかし、このような観点は、溢出の過程と善性の漸次的減少とをパラレルにとらえ、存在を、価値的次元において階層化してしまい、創造の平等性と背離する。⁽¹³⁾また、産出過程における必然性の主張は、創造における自由、ひいては意志的契機を否定することになり、彼の主張は、二重の意味でキリスト教的創造論と対立するように考えられてくる。プロティノス自体についても、「一なるもの」と産出の必然性をどう解釈するかをめぐる、研究者の間でさまざまな論議が展開されている。*creatio* と *emanatio* とを対立視し、ひいては、〈*quia bonus*〉と〈*quia voluit*〉の両モチーフを *antimony* においてとらえようとする論議は、実は、プロティノスにみられる産出の必然性をいかに解釈するかの問題、換言すれば、必然性を「一なるもの」の側にのみ求め、「一なるもの」は、生まざるをえない、とする解釈が根底にあるように思われる。たとえば、Cousineau に

みられるような、アウグスティヌスにおける両モチーフの共在を対立とみる観点も、上述のような特定のプロティノス解釈が背後にあり、またそれをアウグスティヌス自体にも定置させ、そこから彼の思想をみようとする所から生じたものと考えられる⁽¹⁴⁾。

このような見方に対し、Kremer は、両者がかならずしも対立せず、また、歴史的にみても、両者は交叉し、連続していると反論する。そして、彼は、プラトン以降、プロティノスを経て、トマスにいたる、一連の系譜をたどっているのである。彼の論拠は、プロティノス自体においても、〈quia voluit〉の契機が、〈quia bonum〉と共に存在しており、「一なるもの」の emanatio の根拠を後者にのみ求め、そこに必然性を看取することは不当だとみることにある (K², SS. 12-13)。また、「一なるもの」についていわれている必然性とは、たとえば、ライプニッツにみられる〈necessité morale〉に相当するものであり、かならずしも、創造における自由とは対立しない、と彼は考える (K¹, S. 248; K², SS. 4~5, 9~10)。われわれは、先に、emanatio に、二重の意味で creatio と対立する契機をみたが、価値の漸次的減少の問題についても、彼は、同じくライプニッツの〈malum metaphysicum〉の概念を適用し、解釈することにより、解決されるものとみている (K², SS. 422-3)。彼によれば、creatio と emanatio とは、「完全かつ善なるものは、自己をわかちあたえ、おのれにかよったものを生み出す」という点では一致しており、したがって、〈quia bonus〉と〈quia voluit〉の両者について、必然対自由ということから〈entweder-oder〉においてとらえるのは妥当ではなく、むしろ、両者は、〈sowohl-als-auch〉の関係において把握されるべきだ、と彼は主張するのである (K¹, S. 258. 264)。

彼は、以上のような論点を支えるものとして、トマスにみられる、emanatio による creatio の解釈をとりあげ、とりわけ、《Summa Theologiae》(I. Qu. 19. art. 2)' と《エンネアデス》第V巻第1論文「三つの原理的なものについて」(6, 30~41) とを比較し、両者の類似性を指摘する (K¹, S. 261; K², SS. 421~2, Anm. 60)。

トマスは、そこにおいて、〈diffusio proprii boni〉を、意志の特質 (ratio voluntatis) であり、自然本性的傾向 (naturalis inclinatio) とみ、とりわけこ

のことが神に属する、と主張している。Kremer は、そこにみられる〈naturalis inclinatio〉が、プロティノスが、当該論文において、「一なるもの」からの溢出に適用している〈ἀναγκαῖα〉に相当するものであり、両者は、トマスの場合、より意志的契機が重視されているにせよ、本質的には同一のことを述べているとみなす。⁽¹⁶⁾換言すれば、彼は、〈diffusio bonitatis〉という点において、creatio と emanatio とは、共通性を持ち、また、〈quia bonus〉(プロティノスに即して例えば〈quia bonum〉)と〈quia voluit〉の両者は総合されうる、とみているのである。⁽¹⁷⁾さらに、トマスの同箇所にもみられる「神は自らも、そして他のものが存在することを意志するのである。ただし自己はこれを finis としてであるし、他はしかし ad finem としてなのであって、つまり、他もやはり神の善性にあずかるということが、神の善性にふさわしくある限りにおいてにほかならない」(訳文は高田三郎氏による。邦訳第2分冊150頁)、という発言を援用するならば、先にみた、creatio における emanatio および participatio の両面についても、前者は、〈diffusio bonitatis〉を、創造者の側に即してみたものであり、後者は、被造物の観点からとらえたものとして、両面を相即化することが、可能にもなってくるのである。

われわれは、以上、創造の根拠に関して、creatio と emanatio の両者を、対立においてみるか、連続的においてみるか、二つの観点をみてきた。しかし、問題は、単に、プロティノス、アウグスティヌス、トマスをいかに解釈するかにつきるものではなく、より本質的には、〈causa〉という、いわばギリシア伝来の概念を適用することにより、創造を理解し、説明することの妥当性、および限界へと遡及され、このこと自体が検討されなければならないように思われる。一例として、アリストテレスにおいて、causa が、神について、どのように位置づけられ、関連づけられているかをみてみよう。そこでは、《Metaphysica》(A7, 1072a 26 sqq.) からもうかがえるように、神に対しては、causa efficiens ではなく、causa finalis のみが帰属させられており、両者の神における共存は否定されている。⁽¹⁹⁾そして、その理由の一つは、神が、運動の究極因として考えられていることに、求められるように思われる。換言すれば、アリストテレスにおいては、神は、「不動の第一動者」(πρῶτον κινῶν ἀκίνητον) としてのみ、いわば、logico-

ontological な次元において、causa としてその存在が要請されているものと考えられる。また、プラトンについてみても、善なるものが原因としてみなされる場合、トマスも指摘しているように、それが善であり、目的であるからではなく、善の forma である限りにおいて (per modum causae formalis) causa とされるのであって、善と causa との関連は、かならずしも必然的なものとは考えられない。⁽²⁰⁾ さらに、causa は、宇宙を、生成したものととらえるにせよ、乃至は、不生不滅とみるにせよ、いわばすでに出来あがったものについての説明原理であり、そこには、実際の過程との同時性が含意されておらず、無時間的なものだといってよい。神の歴史的・意志的行為としての creatio と、causa とは、かならずしも両立し、そのまま直結しうるものではないはずである。神—宇宙の関係を、原因—結果の関係を充当し、理解しようとする場合、神を causa finalis, causa efficiens のいずれかにおいて、乃至は、両者の共存としてみるにせよ、また emanatio の発想を援用してみても、そこになんらかのずれが生じてくるのは避けられない。creatio と emanatio の関係をめぐる解釈の対立も、そこに causa という概念を介在させてみようとするとところに一因が求められるのであり、つまるところ、ギリシヤ的諸概念を、creatio という事実とどう関連づけてみるかの問題に帰着するといつてよい。この問題は、先にもふれたように、単に現代における解釈上の対立につきるものではなく、歴史的により深い根を持つものであり、本来異質な、成立の根拠を異にする諸概念を導入・適用し、creatio を理解すること、換言すれば、創造のギリシヤ的理解の是非の問題へと遡及・還元されうるように思われるのである。

註

- (1) この点に関しては、拙稿「テロスと神」(弘前大学人文学部紀要『文経論叢』Vol. II, no. 4) および、「創造と悪」—『ティマイオス』とフィロン—(同誌, Vol. II, no. 2) 参照。
- (2) このモチーフが、アウグスティヌスにおいてみられる箇所については、cf. Cousineau, pp. 255—6, n. 8—12; K¹, S. 257, Anm. 98.
- (3) <Cum enim dicitur, Deus ex nihilo fecit; nihil aliud dicitur, nisi non erat unde faceret, et tamen quia voluit fecit.> (Ad Orosium, I, 3) そ

- の他, *De Gen. con. manich.*, I, 2, 4; *De Div. Quaestionibus octoginta tribus*, q. 28; *Ennar. in Ps.*, 134, 10など, Cousineau (p. 254, n. 1~3), Kremer (K¹, S.241) 両者共, 同一の典拠をあげている。
- (4) このモチーフの歴史的系譜については, cf. K¹, S. 241, Anm. 1~7.
- (5) *Ennar. in Ps.*, 134, 10; cf. K¹, S. 259, Anm. 107; Cousineau, pp. 256~7. なお, Cousineau は, この箇所を三段にわけ, 解釈しているが, ここで展開されているような神的意志の自由は, indigentia から止むをえず (necessitate) 制作をなす人間の場合との対比において強調されているのであり, 神の operatio にとって intrinsic な意味をもつものではない, と主張している (cf. p. 261, n. 30)。そして, さらに, この箇所は, 一見, 両モチーフが総合されているかのように見えるが, 実際は共存にすぎず, <agere bonitate> は, <agere libertate> を神について適用しようとする場合の modo eminentiore だと彼はみるのである。
- (6) プロティノスの思想構造を, <emanatio> という概念で特色づけることの是非については, cf. Dörrie, H., *Emanation, Ein unphilosophisches Wort im spätantiken Denken* (in *Parousia*), SS. 119~141, esp. S. 136, および, 拙稿「創造と必然性」—プロティノスの「一者」をめぐる—(弘前大学人文学部紀要『文経論叢』Vol. IV. no. 4) 参照。本稿では, 便宜上, この語の適・不適の問題は別にして, 慣例に従い emanatio を用いる。
- (7) cf. Cousineau, pp. 254~5. 彼は, Gilson (*Introduction à l'étude de Saint Augustin*, 2^e éd. p. 248) のように, 両モチーフが容易に調和されうるものとは考えていない。
- (8) *De civ. Dei*, XI, 9; cf. Cousineau, pp. 266~7.
- (9) *Conf.*, XIII, 2; *De gen. ad. litt.*, I, 7, 13; cf. Cousineau, p. 265, n. 49.
- (10) プロティノスについては, 註(6)拙稿参照。
- (11) 神の inmntabilis という発想と, ギリシア哲学に伝統的な形相の不変という発想とが親近性を持ち, 結合可能であることは, あらためて指摘するまでもない。また, このことが, いわゆる中期プラトン主義以降顕著化する, イデアを <λόγος θεοῦ> とみるとらえ方が成立してくる際の一契機となったと考えら

- れる。(cf. *De civ. Dei*, VII, 28 にみられる Varro の引用)。
- (12) cf. *Enn.*, V, 4, 1; V, 1, 6, および本稿註(6), 拙稿 pp. 122 sqq. 参照。
- (13) cf. *Enn.*, III, 2, 18, 2 «...αὶ δὲ οὖρον ἐξ ἀρχῆς οὐ πασαι ἕσονται». なお, このようなプロティノスの観点は, *Tim.*, 41 E; *Pol.* X, 617 E にみられるプラトンの場合と対照的である。
- (14) このようなプロティノス解釈の是非については, 本稿註(6), 拙稿 pp. 55, 58 ~61参照。必然性をどのように解釈するかは, 『エンネアデス』全篇の意図をいかにみるかにかかっており, もし仮りに, creatio と emanatio とを, 創造に関して対比しようとするならば, 「自由」対「必然」ではなく, むしろ, プロティノスにおいて, 創造(産出)が, 意識外の厳然とした事実としては考えられておらず, 意識内の過程と未分化のまま癒着していることに求められなければならない。彼の思想の核心は, プラトン, アリストテレス以来伝統的な諸概念を用い, またその枠組の中に, 彼自身の意識の経験を体系化し, 位置づけたものとして考えられる。また, creatio と emanatio の対立を, より広い歴史的展望においてとらえたものとしては, cf Ivánka, E., *Plato Christianus*, SS. 70, 82, 86~92., 259, 284, 457 (彼については『西洋古典学研究』XVII. 所収拙稿書評参照)。
- (15) Kremer の Cousineau に対する反論については, cf. K¹, SS. 258 sqq., Ivánka に対する反論については, K², SS. 422-3.
- (16) プロティノスとトマスはこの点に関して類似性のみられる箇所については, cf. K¹, S. 261, Anm. 119.
- (17) <diffusio bonitatis> なる概念の歴史的系譜については, cf. K¹, S. 247, Anm. 27.
- (18) cf. *Sum. Theol.* I, Qu. 5. Art. 4 (「善は目的因という性格をもつか」)における異論解答。
- (19) 「不動の第一動者」に対し, 「神」という呼称を用いることの是非, および, 中世におけるその interpretatio christiana については, cf. Düring, I., *Aristoteles*, S. 219, および, *Met.*, A7, 1072b 24 sqq. にみられる <τὸ ἀκίνητον κινουῦν> から神に関する議論への移行。

- (20) *In I Met., Lect. XI* c. 178, cf. Henle, R. J., *Saint Thomas and Platonism* (The *Plato and Platonic Texts and Sources*, p. 91, no. 27, および, p. 91, no. 24=*In I Met., Lect. X*, c. 170).